



TITLE:

はじめに

AUTHOR(S):

柴田, 一成

CITATION:

柴田, 一成. はじめに. 京都大学大学院理学研究科附属天文台年次報告
2008, 2007年(平成19年): 1-2

ISSUE DATE:

2008-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/172504>

RIGHT:

1 はじめに

平成 19 年度 (2007 年度) は、附属天文台にも少し明るいきざしが見えだした 1 年でした。空白だった教授のポストがようやく埋められることになり、平成 20 年 4 月より国立天文台准教授の一本潔氏が教授として就任されることになりました。また、平成 19 年 4 月からは、飛騨天文台の非常勤職員だった仲谷さんが、正式に技術職員として採用されました。それぞれ、黒河前教授、石浦前技術専門職員の後任ということになります。

附属天文台 (花山と飛騨) の構成員は平成 19 年度末の時点で職員と大学院生合わせて 39 人、うちわけは、常勤職員 7 人 (教員 5 人、技術系 2 人)、非常勤研究員 (PD) 5 人、非常勤職員 10 人、院生 17 人、となっています。平成 19 年度は、ひので衛星効果もあって、論文 64 編 (うちレフェリー論文は 50 編) が出版され、学会・研究会発表は 173 編 (うち国際会議発表は 57 編、招待講演は 13 編) にのぼりました。さらに、博士 3 人、修士 4 人が誕生しました。

附属天文台の様々なプロジェクトも着実に進展しています。藤原洋氏 (ナノオプトクス研究所代表取締役) の支援で進みつつある 3.8m 望遠鏡計画は、2007 年 12 月に望遠鏡用の鏡を開発するための研削加工機が完成し、いよいよ計画の山場というところです。加工機完成記念式典では、藤原氏はこれを 30m 望遠鏡開発の端緒としたいと雄大な構想を披露されました。いつもながら、大変元気づけられるスピーチでした。宇宙物理学教室では、太田教授と嶺重教授の二人の新教授が着任し、附属天文台の新教授 (一本潔氏) と共に、長田教授を中心とする 3.8m 望遠鏡計画を推進・支援する体制がようやく整いました。附属天文台としては、3.8m 望遠鏡計画を中心とする恒星 (突発天体など) 研究と飛騨天文台を中心とする太陽研究を附属天文台の研究の 2 本柱として位置づけ、本望遠鏡計画については宇宙物理学教室と共に、大学連携・産学連携 (京大・名大・国立天文台・ナノオプトクス研究所) 共同研究を着実に推進しつつ、2012 年の望遠鏡完成を目指して、なお一層の体制強化を図っていききたいと思っています。

2006 年 9 月に打ち上げられたひので衛星 (SolarB) は、誰も見たことがなかった素晴らしい太陽観測データをもたらし、新しい発見が相次ぎました。その初期論文が、サイエンス誌 (9 編)、PASJ 誌 (日本天文学会欧文誌) (43 編) などに特集号として出版され、新聞などでも報道されました。本天文台も「ひので」研究では、彩層ジェット (柴田ら)、黒点暗部輝点 (北井ら)、浮上磁場 (大辻ら) などの研究で上記雑誌に初期論文を出版しました。飛騨天文台のドームレス望遠鏡の観測時間は原則として、すべてひので衛星との共同観測として位置づけ、太陽の国際共同観測に大きく貢献しています。その間に飛騨天文台で取得されたカルシウム線スペクトロヘリオグラフ像が国際的に大きく評価されたというニュースは大変嬉しいものでした。従来行われていた関連研究者への観測時間供与は、ひので衛星との共同観測優先のため、しばらくお休み状態ですが、観測データは基本的にはオープンとする方針ですので、関連の皆様のご理解、ご協力よろしくお願いします。

学術創成研究「宇宙天気予報の基礎研究」(代表: 柴田一成) は 3 年目を迎え、2007 年 8 月に中間評価ヒアリングがあり、追試の現地調査会 (於: 花山天文台) までありましたが、最終的には A 評価を得て、ほっとしているところです。2007 年 10 月には学術創成研究の一環として、京大生存研、名大太陽地球環境研などと共同開催で、国際 CAWSES (太陽地球系の気候と天気) シンポジウムを京大時計台で開催しました。世界中から 370 人以上の研究者 (外国人は 150 人余り) が集まり、その点では大成功だったのですが、外国人太陽

研究者の参加がわずか 20 人ほどと少なかったのは残念でした。

京大総合博物館の宇宙に関する企画展示プロジェクトは、2008 年 4 月からの展示開始に間に合わせるべく、天文台あげての準備となりました。ご協力いただいた皆様方には深く感謝します。その関係で、「京大天文台アーカイブプロジェクト」というプロジェクトも始まりました。これは博物館企画展示の準備会で、博物館の某先生が花山飛騨天文台の歴史に深い感銘を受けられ、第 3 代天文台長の宮本正太郎先生の直筆の火星のスケッチ (3000 枚) や、戦前の彗星写真や天体写真乾板など、過去の貴重な観測データをぜひデジタル化して後世に残そう、ということで始まったものです。文化財としての保存だけでなく、変光星など過去の天体活動の貴重な記録ともなるので、現在の天文学研究にも活かされます。

飛騨天文台フレア監視望遠鏡 (FMT) のペルー移設プロジェクト (CHAIN プロジェクトの一環) に関しては、飛騨天文台の上野助教とペルーのホセ・イシツカ博士を中心に、着々と準備が進められています。その関係で国立天文台より予算の支援を受けました。記して感謝します。

昨今の理科離れに反比例するかのように、花山天文台・飛騨天文台への見学、観測実習への協力依頼は年を経るごとに増加しています。2007 年度 1 年間に行われた見学・観測実習の件数と見学者のべ人数は、花山天文台で 30 件、約 1580 人、飛騨天文台では 14 件、約 440 人にのぼりました。花山天文台における見学や観測実習の対応は、参加人数が多いと職員だけでは対応できないことが多く、院生や学生諸君の応援を得て何とか実現してきました。しかし院生・学生諸君とて、いつでも対応できるわけではありません。そんな折、NPO 花山星空ネットワークの存在は大いに助けとなります。NPO は 2007 年 6 月に正式に法人化が認められ、黒河名誉教授 (NPO 理事長) をはじめとする関係者の方々のボランティアにより、2007 年度内に花山天体観望会を 6 回開催しました。NPO の皆さんには、ここであらためて御礼申し上げます。NPO は形の上では京大附属天文台と独立の組織ですが、いわば附属天文台の応援団という位置づけで、急増する実習や見学の希望に対応するためにも、NPO の協力が不可欠となりつつあります。皆様のご支援よろしくお願い申し上げます。

平成 20 年 (2008 年) 11 月 24 日
京都大学大学院理学研究科
附属天文台台長 柴田一成